源氏小？見 三

源氏目録巻之三

十六 乙女（としめ）
むらさのなしひ
たり祢
日 かやうの
日 くつま火
日 みゆき
日 まれさしら

十七 玉鬘（たまかつら）
むらさのなしひ
むちふ
日 ゆきなり
日 ぬりけき
日 ゆらけり風

十八 梅うえ

十九 菊のうら葉

十六　し女

此書し女といふ事賀茂の源内のまつりを
いつるを大内まてはとめさせ給ふ時分は十
一月なり二十よりうちの女房とて給へ
五人のとうさまいてしをてて舞姫とて
大内殿へ下一人なるのうちより来るやうれ
はんしはとめ給ふとしはめれとのうれをつ
うむもとめを出し立てまいらせ給ふよ志
のひてのうさくはんすを出はむし源
氏のまくれもやしれり来りしとめ

とものひかりしくいまさ思れかく
かりしめを人わりを思をかりしめし出
くそれもいまは年ゆりぬるん我も年ゆり
ぬとおりしめしてよをうふ所
とゝめこう神さひぬらしあまの神
ゆるさよれとをよもひ思ぬ事は
とゝるんをひしゆへよし女といふなりけり
かけくいはなふのことをおりかゆる
日のもの家の神なりとけしを
相これを問りむとめはをまく大内にとの

内侍のとけとてさつらせらるゝ元そなん
しの御子わかひの上の御服のけり是のち
まはなきりの大しやうとしてさせすふり
此事よりとれくゝんなれすふおまこれ
御子ともうゝなりし人なりしことは
しかし神の神楽の義なれはいふも神祇有
なし又此事は分きりの大しやう十二ま
く元服そのころよりわらの内大臣の御
むとめ十四ちりは成給ひしうゝ大
文のりとはおひそらすふをおさなき御

んはつく心はけてらひたれひきかなあ
ましつる月さ給らひたり父大納言は御せ
給ひてわやかくひきのまて御前にさま
うまくものひやうはらひりふけ御
まゐらしたまひてわか秋の梢
めり雲井のうりの露こそしけのひ
給ふはなりあしとかへりきこえて
いときなりひのまうらしなりけれは井には
のうしろのおまへよおとこみやこてひとれ
とりまひくめてこりしその御とこゑ

雲井のうり　　稱さ兒

もゝちひ

おさなれ程の御心にしいとこなといふ
にくへし又此人の事ハ云位とくせぬ
いふ事ハ得りしなふ事をとおもふ
と此人をあるときいかなるひまふかつと
こゝろまて掛るうし給ふと此雲井の局
乃めのと服さらて多きりのことはいふ
云位にておいしまる程ハ此姫君をいとう
くるへまつり給いんとうしはきまふなれを

なをやまたしれは云位をくせしとなる
らしなり色はことにいりて付へし
色おはいかなる成りてなれ　五てなきりの大
しやうの和れうをは雲井のうりと心にも
なきりは付んもよつうしくまへしを
ころは秋なりへ又はまたり源氏のなとに云
菓京極あたりは四町をしめて殿になし
つまして音の女房なとら渡しやうなふ
はとのよんとれこのこ庭をはくつましな
つまはつ南のひしはいしきこれ上

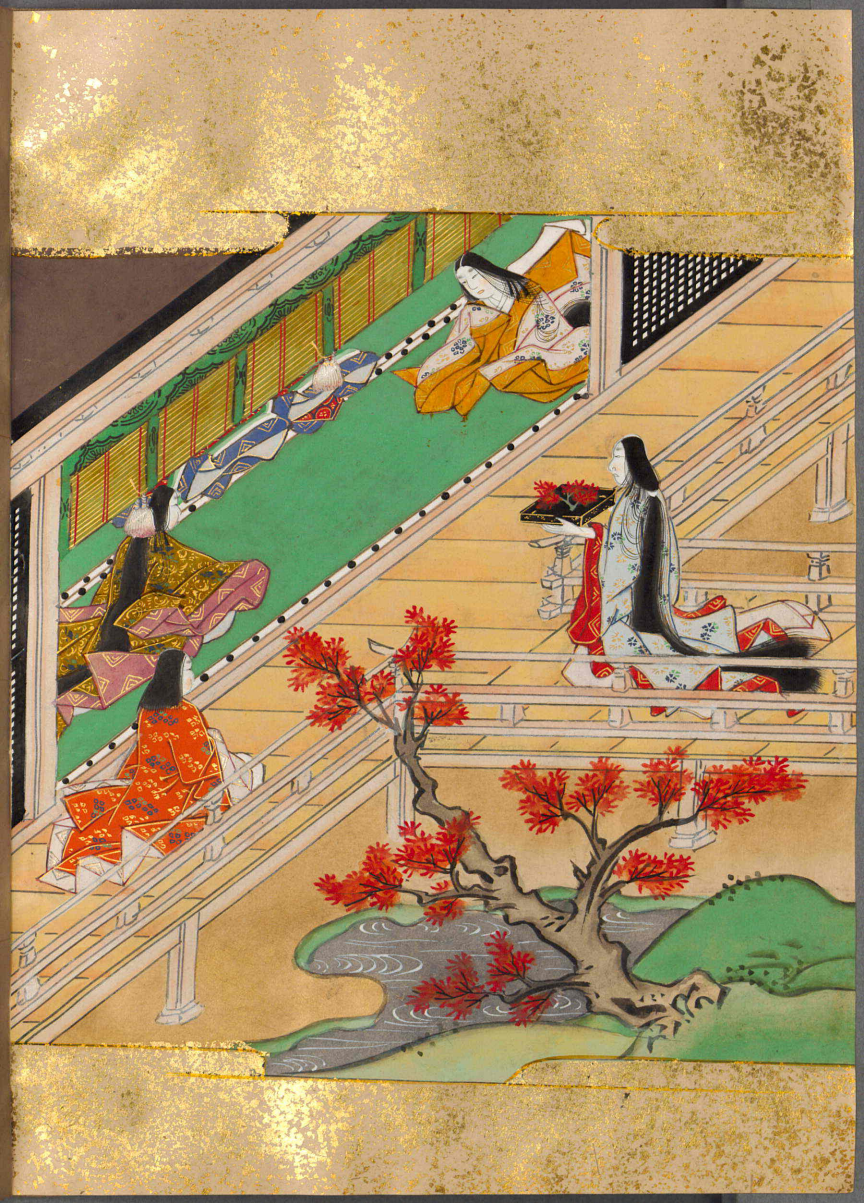
の所にて表のあをかのをしめかふ表の
くさ来とも数を所にしてうつる所さ
てことに表の所にともかれ東の所よ
白花ちる里とやくしは夜の所にて
うの花さうひくさよふち所しなと
極をまひさりこ生は面がりてなり花
ちる里なりよそへて称し所を極つれ
女活とか云葉の葉を和の所じとめらん
しの所屋しまひの所じとめなれはふし
ひつしさうの所よすまかふこれは内よりと

出のふもとにはなかりし此母の花秋風夕
志ら露人は秋乃野とこそかなふらし糖く
まなもられ紅葉の色とまりへしにあり
ろしきはのおりく此ころ秋とこの心中
文治泉院乃男されたかいてこそうまゝ
しおきりかはあのこすかは山名にはき
大井よれはしまりしうろうて縁も也見ゆ
小倉は名のをしきとうつして名枯乃
嵯峨人のをしきな文葉の松雪にあまさま
しらふかすれもあまめへしとてとらく

かりしろしう信の事よくくきうけん
て付へし去ほとまかくくとのうつりあ
くそくして秋このむ女にんにうそ乃
よろ形りまわひそれはとまかりしろ
きまかれ女信にうとりもみらを箱
のうさり入てうへまうのいとりてはき
さようなりをけつかひまてしまえ
のよ乃にうとの去にんにうへに寄す
秋このむ中くう
ちゝ浮し去まつそのはいりなとの
もみらと風のけくふさりまんる

とゝまてをくれなりけるはしまれ
ふるさりこけしきいまれのんまへして
又葉のえるなり
風りちる紅葉ハかゝし雲の笑を
いまの○の松りかけくとて見め
と云ゆしもあへしこれの雲又むらされ
のよのけるとりかの女御秋のけるへて
その紅葉見けるまこれもまれをいま
秋の松なしとりしれくしく去年のこと
をけるりしてけつかひ

死をのくこてゆをさつやしてゆまに
秋まつむしはうとくあるるん
との結びて道のまゝりしはいとおり
ろさゆんともなりうやの事はとゝめ
書りあんとうるゆなれはれなし所まか
さし雲井のうりみはし女なとよは付ま
しくくんうへしは死りみち厳うつ
まの庭のかしきなしは四季のんりて
あらんつらんと
おわしし



十七 ゑあはせ

はしめゑあはせてうす第一本風ゝよき絵也
なそしの筆すりしきこれにのかき
よめうつの絵君のゝしりの行き
まひしと右をはゝてまうりあひく
源氏の君にゃんそまりしうひつてとり
てりくなりしかけゝをすとしきこれ
のといへるすまの絵よしうしひそ
よろのひしたり
らひとしぬかいそれなきにまう

いかれなすらをそうの○さつるん
とよるんまひしあなり相はむうつとふ
ゑなかのよりふりなくとくきまひし
こと年いふきとも忘れ給ひてさ御く
人をるんまふまもあへなくさしもてし者
のよきかれんりうつきまふまうこみる
ほうひまふ右をまりいさりくしを
うなしをていうふしてかの相うり
せしなてしことそうの○出さましとお
もひまうりまふかの姫君は年四りて

めのこふはまつ殺してはしへあさは給
みくれてなひのまつよはつらふく
かりけなくうなしくれひさうまの
けとよめれとおまれよつえつをりて
なしうはきそてさりうひたくめ
のよのおもとこ小碓命（やまとよいのら）はまねらつひあく
そのしくてめのとこととくこそてま
はつ殺よなきひの国のしめこしつひよ
つまてとてりけりとてむとて命と
とつ荒よおもひてくるしきを殺よ

めれと三人してとうくかまへて家へのか
らせをてまつるほし二十三これをほ
うしのかりといふれ夏のしやうん
をいてのふをやをてんとうんとおら
てうやふまてらせをてまつるなりと
きをほうしよりのうやふせといふを
こと葉

九年　うやうの

ほくしのかりをといふるを付へしかくて
のかりうせまて右をまつりあひかんし

のかしこまりてむかへゆりてをれさて
まつりてひけくろのたねれ小の方まな
ゐとうらの内侍のうしけ給へはむかつれ
内侍れうしとはかきうなり山人もせへ家
ゐとうふ事は家へうりてたううさなく
父おとくまもいまさまさと又源氏の
おとくもたり給ひとれ当れくらにあり
ゐと菓をとれ用きうる鳥の屋うまそれ
かしめしうなしこまうかなしされまし
神仏まれたうへそのこ給ひてまつもせへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いはまうさくらのゆそなりにはやか
なりかい釋りれそつくひめ君にはまう
なめりあさもなるにかつふにりんとりさ
因なきめさそれとふりひ居りなしぬ
りいとこきりい釋りなしてハ夜に御
うくりりなく赤き山ゆきの花にを
つきものまかそなりしれ西乃そいま
そてきはりりふうへハこゝぬ居りまく
かりしあまそうらのおしくにもすやうま
あなきよけとハしてなりしなきめし

くゝみてみすかたのましゝぬよにうち
なめりしきふをしつゝ物を文
りハ出し給ひ○ととの見(みん)あり給へ分
よそなりしてそしきうちのしきハ
ゆりし文つまあうなるすわりしきは
かしらぬ根(ひ)果(じ)とやなしつまりかと
つとしいとつ文のすゝしなりからあれ
ことくすきはしりと云と有う文とは
こうたいをもう云なりゆりし色とい
つまの称りぬさこうたいのまなり

此季よろこひて君とくうら給ゆて
ゆうし免そはこうこひとこくれ参
ゆりすうしうことなれとゆうすこり
給りめてたくいうしきくまいらせまいりて
まし又極楽にて候

これはこそ
かれ

あ弁の

申しゆ

初祢　むつきのたちひ

此巻を初祢といふは明石の上の哥に姫
君としわかれたる上ののちとしまたなりひく
おもしきもいかんとてまつりまたりて
年しをまつふり月一日ゑれてふんまま
つもをみ附の音よ明石の人
とし月をまつにひかれてふる人に
けふうくひすの初祢きかせよ
此哥本音より
まつのうくはなくらくひとれとしとて

ゑ川称の日とはいふへかりまれ
和高さかもとしらえてそてまつりし
ゆへ也又葉の枝よ ひけとけりと なとく
云事付へし又はそふとさめのいたひ
の解うしかんの事をしらされよりは
源氏かんもそてまつるものひしなりそれ
かりの御所よまんし 但うとこかりの所なし 月の方よりまつるかり
うと和とけめろいけのうしかんりは
ようふそくひなさうけそなしへる
とよまものひしなりはんなとそれあるも

く初春のいとひ

なれい

付き度

をまつ

し

明蝶（こてふ）　むかつのなしひ

はやくてつて云事はむかしは院の家一の人
きゆきなしし四季（さ）は四債（どうゆ）經（きやう）としていか
めしき大法會（かうむ）を仁王（かんまうゐ）經（きやう）大般若（はやうゆ）經（きやう）ともい
ゆり私このむ中家は出家のかんまて
とこなるやうにそはすてはしらさき
のよも佛は花をてまつり法ふとて中
家の四ゆ人花をてまつるやうにとりてふ
ふもしいと八人ならことに調さやうひて
鳥はしろうまの花かめまさくらとき

してゝふまいこゝ〇のかゝりしふされ
なしき花の一ふさいかゝりしうふなき
まかひを行くやりこてふ花そのへ寄り
てゐるとありし女の書よ書まつそのゝ
ゆゑまし花そのこてふとさへ聞と申
とくり給ひしもけ書なれいこてふと云
相けし書より毎あそひ二の毎とうへく
ひくありてんゆきいかりし所ありしす
古花は書なるへし

侍れはおもふこゝろのなかにひ
しゆきやうしつるに紫式部
なくさむもやうやくのおもひつゝに
人のうつはに貴ゆゑんは
むらさき哥に
しるいやくめとのことをかきけれは
いふうらの図かひなりけめ
ひさはむらさきのしのひてつかう
しけるを思によくはやうしたる
いとおかしき井に源氏の物かたり紫式部は風や

ひとりとうりなくぼんよりけうひてみ
月のうつ和ものひてなつてそうよりん
すきくしをうれ姫ものうちれを
きてれうしきをとえよりんをそてま
りうしてくぼんとりくをりんうや
をタつをはうをとりくれわりてき
ちうのをひしよりをうえとをを
でくかうるんやりかのうつの
をんをうよう海をうけしをを月い
りをちうよてりうを神をうてをう

なとしつゝあつきそめしにしたへそより
かのうつしの親王と申し人は清和天王
の男女の御子ひとのよそそうしと世を
きりはかのこうしに我をとけるを
ひとひとしありけりしに世はいさ
ちやうのすきうけの筆あやめの上に
同うの事をかれかにしまとつる
を付へし五月ぐるの

[illegible]也

雙葵（とこなつ）むかつのなかい

此事とこ夏と云事むかつの花のすま
せ給ひしとは西のそらいと云つまひ此ひ
の庭りいなてしこの色と調なるかれ
も又面まとなてしこなるもとのへ
極まるさかりかのあまよのりのさりに
ちかしこ此姫君となてしこともかなり
出しゆへすやおりし所し咲ちきてえ
なしとおりしろし源氏のかくとそし
めなてまつりてワりさんなちこのひ

ますゝ見えく新(あゐ)いしやとまも川ろうの
よりそてまつりうるを以前まててまし
まいゆのふはんもをさ川まし何なく
いつまもへし季(さ)は夜なりいふもす
しきおを付へしそのゆへ

なそしこと

いふ

毎火（うつい）むうつのなりひ

いまそうつまひと云事なんしむうつを
御子ましてもくなしまふとつへも海
ことの御子なし○ハ御心のうちよハ心
乃御うさまんしもみさてまつうちやると
おかしめし入て夜のよの月なきこゝろを
こしらもかうかしきよ毎火をとり
て御祭なことを調させまふを時の御所
よりんし

うつまひよりまちそふこひのかつりこそ

ふかいそこをぬかのとなりそれ
とらんしあなりけしと松ましても海
とりふそひかしあつりけんまかつ生ゆを
つふ
琴をまくら　ゆふ風を
こひのきかり　おきの初風
むかつら
なしいつまあるし

野わき　むろゝのなかひ

此野分といへるは八月に大風ふきて物さへのしを取てのけ井ちらさいれ尾なとせしらしすさましき也りりし也そして秋は風ふきも源氏のこといたしまつと秋のうちをみさてかくさんねらはとこゝなりさて源氏の御子夕きりの大将のいまをき中ねしてのまうしつらなれいりの雲井為しようしゆいとゝのひめ君をうつくしみるわき

て風のまさきかりにいりしのわかしの
もとの姫君のにうへまいりたひてとく
いとうしこひてかの雲井のうへにしほう
ことかうやうにうしろ色しさき
のうしやうなりんえへしこと音より
風さはきしに雲間よりゆへへも
わらうさまなくますかぬさま
程なくいつるあらはれ哥のことをもと
とりそへしかうやしさきのうと思う
らひしとつとなしいつるあらへし相聖

まきのあさけんしあそへ風のとふひな
まつせをひしなり中まもあしの
うへかたしまして大きの風のとふひ
もりまてはきなくゆりをふと申れ
とくりてさらくしくおりして御
ことと目のうまれなるしてあしの
御弁より
かかりさまおれのもとくれ風のとふ
けりをひとつりしむつらして
とよしをひしかりしろき事たなりその

[illegible]

[illegible]

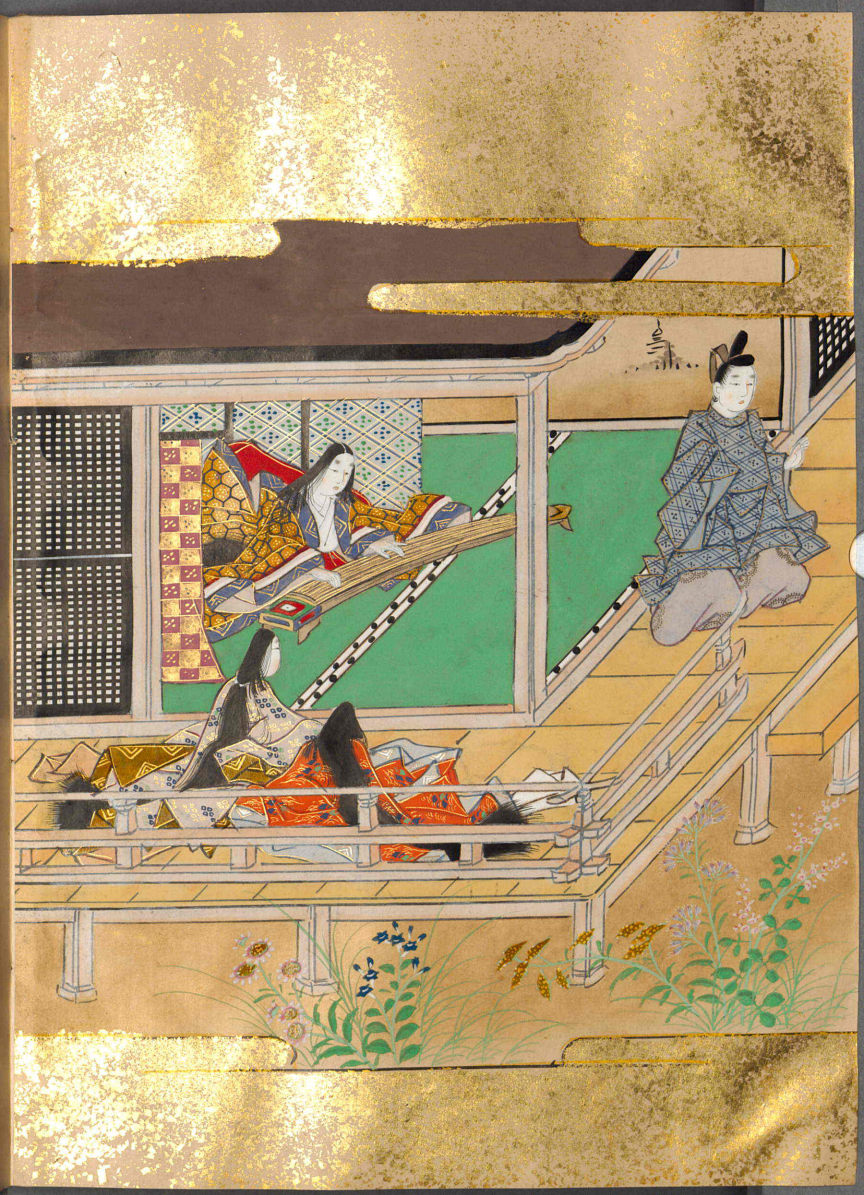
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



御筆 むらくのなしい

はまをこゆさとゝ云筆は此行事は大原殿の
行事の事なりさて此筆とつゞる上は
かゝ源氏の御しのひの御子まいせんかんな
てれりしまりしき此は十二月なり大原殿
をこゆさしまいしまいせんかん

雪ふりさとしかの山まそ御しの
ふりさあとともふ山はそうしよ

源氏は是る

としかゝこゆさはもまろ私をもよ

いふからなからあはれをすてん
霧りすれはそのこゝろ
うんゆきこし としか山
ゆき かきあと
なといつみなへし深山の枝くい
こゆきの
に
佐
なり

蘭（ふちうゑ）　むろつのなかひ

此事ふちうゑといふ事は常に大ぬれ
に并にむろつの内侍にのいまたひ
けるろのにもとへうつまたくふしの
そいよたれしましくありしとおひ
たるし姫の者にやあるふちうゑ
あれはいけよかことをうりし
とよしをひしあなりふちうゑと云つ
そのころ源氏のしりしのにとしうとあふ
ひ乃上のにあよは摂政関白なりかれはさり

よは母このならひくらんの御母女御は
桐はかりのえうしろの御妹源氏にも御おほえ多
ありのさめさいらしたりけむ玉うつ
の姫君しも御うらそうしけ更衣うくさ
さやうは中宮もけひめ君も御そへく
源氏とうしてとやさのふを御らんして
むらの御ゆかりのまへに御わりきこよ
うちかり御つうひよかの中宮どそてま
源りのふよさんりいゆうしくおかね
ともおくさりされは御のおりやけちさ

まきりしゆゑんとつひなして家の乾
いとおりしろきとみその内へさし入て此
弁とよきて四日とつくりひきうこう
しまりこのんとえてうちまゐと
いふるあらい

付りふへし

長末桓（まさすゑ）　むつかのならひ

いまをまれたしらと云事ハ此むつかのひめ君内乃内侍のうちへけてひまくろ乃大ねのおれさりなりすふりとのへいてすひしまをこゝろ十二三りなりすふひめ君おりしまつり出すふとて此哥をきてたしらのすゝしロをこゝろなりへかりひのさゝきてをしへすふすり

いまはとてあとかれぬともなれきつゝ
まれのたしらよまれをロすゝる

とこゝのいしよりのこきのいし紙の文
ひきゝ色なりんへし梅こそまさりけれし
らといつひられひきゝ文のゝまゝしし
これなしけくへしひらといつ手は
巻の名句なりむろへはひきを結う
よひしよりこのふのきいまへしの姿と
よあなへてなしとありひみてそうり
さむきときのうちに割腹のにわの我
またの文乃大ひめ悪して世の花見く
ありりうふわるしりかくさ御手侍く

ぬるこゝろのあさましさ、きれいさはるよな
なくなることゝおもひなるものをよわ
つてひるひてさいはんうつなくれい
きゝはてよなふとうくこゝろのはてこゝる
つとゆゝもわるくなるなるよはをう
つてよるしいそうてゐたことのはい
るるんうろひてゝやすさはゝ
おのこゝとのやうくつゝはれは
んえゝてこゝをひてたよゝとてる
ひゝてゐるひゝうきいのあのは

ひさまやちさなるひとりまひをとりて
まねひしく出るんとかのめさ給ふなり
さゐやまて行き出くひとりをなけ
ひをのふ程りをいもそらひとも屋をこ
うきるんとせしなりそきとりいとう
とまりしをなりもてゆきてはせま
くもまるれるふしとも
たとりのまい　相のけ
うとむ
なといつる付へしはいきなりまいたねをひ

まく給ひしハ見なれたりし御まへの
ともおほえすてなん夜かゝんしきこの
こゝろはうちしもいかさまにかと
おもへていかにとおもひしくよれなき
ことそめてめすきそうし給はん関白よ
く関白のゝ小のまへとうけてた
しかもさへ給ひしやしなり梅し
ことのもんれいきいまさとの中納
ことやむしこらはむろの御給とまう
いめうしく見てあしてんをけやく

て以弄る

おりふしも君はしらしなつきかつり

いたりるねのいろしまたねは

とまたまてまろしなりけるりんねと

とも相こそいたりる中ゆともいひしう

さゆのこと人ふともあらかへきすす

も来と玉かつらはおとしひまておもし

ましとしてつひ

まろりし

なり

十八　梅枝（むめかえ）

はまさむめかえんと云事正月晦日のころ源
氏のおとゝの六てうの院にてそさ相わ
るやわりしこきハわしの腹のひしもとめ
とうくうりまつりすゝ所いそきなり
者ともとひ市へくりていとゝわ
るやすゝやんさいゐんとゆハかのあさう
かのさいゐん源氏りんはよくて屋ゝ
詰ひし人なりはゝにさよりちるとすき
そう梅かえりゆゝはまてうんなりの

つかまそれ拘へて又葉のえたまは付白
きにかりまそきものいきて梅を折
くむとひ付らいとのさ図なよひふ
えなしとおりし後くしなされたるよ
その前
花のうはちりふしえたまとまりしひと
うつるん神りわさくし図めや
とありしなりたき拘と云ふまは又葉
よはまし又なといふへしちりすきて
なお梅のえたまよひうるいとなりれ

つねなしとあるへしなをてこそあかの
ひさかの芳郎のえいとくりさん
ひさしかりてわるるをいとうにし
あるとなるをかなしきことをいた
きをもちりぬひろうへあるとの
ひんくりあるをあるをいとをう
わるるをはかりうをふなふしるに
中をあるさかのこのわんくあるを
いとんをしてしかなるをいかひ
をなりわたいかをしのひとをきてる

まめしうなつかしきかなりとさ
めまふそいのうへのいとくさあるなりふ
とい花をなやるいまめしうすこし
もやきんちらひとそへくめつしきう
かりくいれるこのはのうやりそくへん
りいさふこれりまつるかひおし
とめてまふ花ちるさと なしのはさまハ人ゝ所う
ふくまいとゝまふなる中まかとく
まも立出をあとりつりとさへおもひき
え結へるはんまてそうえうとひと

くさあはせのつりさ面うりしめつる
なりしてあはれなつし名思(おりしのこと)にて
まもらさくまよれるまゆひのさ面
まるふそうがんもあやなしとおり
てくろ志うのとくきそるいされ
の家雀院のうつさせのひてきんされあ
そんのことまえひつうまつまり
百ふのまうなとうそへてよりおまとな
まめりしさとりあつめうろんとさて
とくきうりといはきとともむとく

なしとさためかたといふへきらん（欤しのいへ〳〵）
さるありしゆしのふかりとろ歌の家
とかんさてしにはれしかれとも物とん
こさをふかいれはせさきのへあて
やうふ源るとわさかは花山院に
とをふかうえて花らうてわしれ
といふ源氏のそうのそう源氏あて
物のふいはきしとかりしは物りしも
おやりしもさいくいはゝきるのねは
わひありそうとさためはきゝてみさ

なしまいりて交ゝりなきまふにとく
つき物ありなき物をなてまつりまへを
交の御前は
苑のうをえなしぬ神ようりて
ことあやまりといりやとらめん
とあまはいとらんしなる御とまひ
りふ御車うく新宿をぬくかんし
めつらしとふるさしへもまちそうん
苑のうしきをきてゝへかきこ
とあり梅はにかつと云事の御前の

んなことをとりあはせ付へし又そさ抱
まりしあゆきと云事あらはなふそと
おりふへしと花はとくまて旬ふ名
はそさ抱の名にてはあらと又たき抱
とあらせくは夜ゐたりかたりてうつむ
まありそきもかひまたひて
ワけたりとのたさより出る水り
うつむ門裏の清水りなそへてなと
いつましもたへしまもいしくはじめうえ
のまなあるへし

十九　荻の裏葉

はぎ荻のうらはとつきまし雲井のかりの
ひめさゝをみさりの大ぬみとりの袖の
ぬしよりおりひそめて年をふるり
ひめ君のちゝおとゝゆるし給はりしか
さてしもあるへきなしのハゆるし給ん
のゆゑまておとゝの御庭に荻の花のさ
りに中ぬをよひ出しまふ所あそひな
ともりまてさうけきのは井てり
おとゝ荻のうらはのうらすさひ給へるな

里は哥よ中哥あり
ある日さと花のうしろのうらとけて
美しおりつゝれたるのまん
ありひ語るしとしまれなんといふなり
おもし
しらゆきよかしいかきんつらの花
まつよりすきてうまさそれを
ゆつたり
いくほり霧けきるとしくしきて
花のいしとくおりよあつたん

わきまなくしてこゝろくれまうまくしく
めてさうりし後に三条のうへとは雲の
のうりのはるなりあまさのはるさら出
さまふ法は四月迄さて居りくれし月
よあしのはるのひめ君とうくうに
まいりまふはつり〇はししの桐はなる
はしし十二ししのうゐのはつり〇
なれは源氏のはうそくなりしけいしや
とりさはありしいうてかを待るなん
あまさの文をもちの御母一のこやはとう

くらゐ立まふあらしの中くらゐとはこの
御事なりけれ是○源氏のおとゝ三
十九まで右上天皇のせんしかうつりて
六条院とかき位をこそあまふとてを
をましき御申なし○とも是今
なりまひて後なれはしあらりては
めつらかまめてをし御りくを秋六条
院をこゆきとなしそてまつりまふ
御子乃ゆきりそのこゝろさいしやすり
し後中納言まなきらいのくまてもあ

のうちの君は源氏の門にゆきよろこひ
しまふ君なりんえへし又約束の折り
おりしろうしはそのころれおんとしは
門あるの朱雀院にておはしまほ
ほ人にそしらしてこそ乃おんの御子也
いせんおんにておはしまほ門さとあ
るんにてあるつきと云てうのおんなとひ
けして右の大臣の門さにせられまほ
朱雀院門にんしていくとてあるしの
門さとなほさせまひ院の門さにひとし

くるゝれ
そらゆゑ乃
こゝを
まうけん
して
けるを
[illegible]